

ゲンゴロウブナ (コイ科)



学名 : *Carassius cuvieri*

別名 : ヘラブナ, ヘラ

大きさ : 全長 40 cm

特徴 : 小さいうちはギンブナなどに見分けが付きにくいですが、大きくなると他のフナ属よりも鰓耙の数が著しく多いこと、体高が非常に高いことなどから容易に区別がつく。また、フナの仲間では最も大きく成長する。

プランクトン食性で、微小な生物を鰓の内側にある鰓耙で濾しとって食べている。そのため腸管が非常に長く、体長の5倍ほどの長さになる。

国内の分布 : 琵琶湖原産。現在では全国各地の湖沼、溜池などに放流され自然繁殖を行っている。

県内の分布 : 県内各地の河川、湖沼、ため池などで放流されている。

県内での生態 : 4~6月の雨による増水時に水生植物帯などで水草や浮遊物(木片)などに付着性のある卵を産みつける。

備考 : 霞ヶ浦の水路における調査ではゲンゴロウブナは採集されていない。水路にゲ

ンゴロウブナが出現しないという意味でギンブナやキンブナとは水路の利用様式が異なっているのかもしれない。

本種は遊漁の対象種として人気がある。また、琵琶湖周辺の特産品である「ふなずし」は本来、琵琶湖固有種であるニゴロブナを用いた料理であるが、近年はニゴロブナの減少によりゲンゴロウブナを用いることも少なくない。環境省のレッドリストにおいて絶滅危惧IB類に選定されている。

主な文献 :

食材魚貝大百科第1巻. 平凡社(1999).

川前政幸(1991)フナ, コイの産卵場としての水生植物帯の機能について. 茨城内水試調査研究報告, 27: 135-166.

鈴木健二・青柳 克(1998)霞ヶ浦のフナの形態学的研究-I「霞ヶ浦のフナの形態学的特徴について」. 茨城内水試調査研究報告, 34: 22-28.

荒山和則・富永 敦(2009)霞ヶ浦の湖岸と周辺の堤脚水路におけるフナ仔稚魚の出現. 茨城内水試研究報告, 42: 1-7.